京都祖跡拝登について

善光寺徒弟　黒田博志

永平寺に安居させて頂いてから一年が過ぎました。京都祖跡拝登と聞くと去年のことを思い出します。それは、私が上山して一ヵ月が過ぎて、春安居の方々の間でこの話がちらほら出てきた時のことです。ある春安居の方から「秋安居も行けるんだよ」。といわれ少し疑いながらも、頭の中は京都でいっぱいになっていた。(といっても京都と聞いて思い浮かぶのは、金閣寺と舞妓さんぐらいのものですが)それも束の間、講送和尚さんから「秋安居は来年だよ」。といわれてがっかりした思い出があります。

それから一年が過ぎ、私は鐘洒から伝道部へ、伝道部から吉峰寺へそして現在は後単行寮に所属しています。ここは文字通り後堂老師、単頭さんの行者(あんじゃ)です。行者というのは、得度、未得度を問わず、寺の住持や重役に従って雑用をさせて頂く修行者をいいます。具体的にいうと、お部屋の掃除や、飯台の準備をさせて頂く。また法要の際には、侍香を勤めたりもします。

そして、この度の京都祖跡拝登では、第一班

で行くことになり、この班の引率の役寮さんは村上単頭さんとなっていたので、私は京都にも行者として行くことになりました。正直な話、京都の祖跡を巡拝することの期待よりも、ちゃんと行者が勤まるかどうかという不安な気持ちの方が強かったような気がします。

そんな気持ちをもちながら出発の日が来ました。出発前に旅の安全を祈願して『般若心経』と『消災咒』の諷経を挙げ、大衆一同バスに乗り込み、いよいよ出発しました。私は単頭さんの行者なのでバスでもその後の座席に坐り、いつでも動ける状態で居りました。バスに乗ってしばらくの間は行者として何をすればいいのか等を考えておりましたが、次第に普段の疲れのせいか眠気が襲ってきました。

そして目が醒めるとそこは最初の拝登の地である「開堂説法の地、興聖寺」の近くの駐車場に着いておりました。ここから興聖寺までの道のりは、目の前には日本三大橋の掛かる宇治川が流れていて、川辺を歩いていると本来の目的を忘れて美しい清流を眺めて歩いているうちに、興聖寺の琴坂に着きました。琴坂を登りきった所には、山門がありこれは白い壁の中国風の建築でした。山門を通り境内に入ると、永平寺とよく似た伽藍配置となっておりました。

この興聖寺は御開山道元禅師さまが建立された最初の道場です。この道場で懐奘禅師さまをはじめ、多くの日本達磨宗の人々が入門されました。また御開山さま自身も『普勧坐禅儀』、『正法眼蔵』、『学道用心集』、『典座教訓』等、多くを選述されています。またここには数人程、私達と同じ様に雲水が生活していて、非常に顔の表情が落ち着いたように見えました。きっとそれは永平寺と同じような静寂した環境によるものでしょう。そして法堂で諷経を挙げるので、私は単頭さんの着替えの手伝いをさせて頂いて

から諷経に随喜しました。その後、山内を散策しました。中でも伏見桃山城の遺構が用いられた本堂の廊下の天井には落城の時の血の手形足跡が残っているのがとても印象的でした。

次いで、私達は伏見区の久我家のお屋敷跡に建立された誕生寺を拝登しました。ここには、今年の十一月に落慶したばかりの坐禅堂と鐘楼堂がありました。坐禅堂はとても立派なので一度坐ってみたいなあと思いました。

次に、欣浄寺です。この寺は道元禅師が宇治の興聖寺に移られるまで過ごされた寺で、当時は「竹林山安養寺」といい、道元禅師「深草閑居」の旧跡と称されています。鉄筋造りのお寺でしたが、御本尊はその建物からは想像もつかないほど大きな毘盧舎那仏像でした。別名「伏見大仏」として、知られているそうです。また、御開山さま自作の石像と詩碑があり、「深草閑居の偈」が書いてありました。宋での修行がいかに厳しいものであったか、私には想像もつきませんが、いつかこの詩が理解できるよう、日々精進していかなければならないと思いました。またここは、深草少将義宣卿と小野小町のゆかりの地としても知られています。

中食を頂き、次は臨済宗大本山建仁寺です。道元禅師が比叡山を下って清新な宗風に出会ったところがこの建仁寺です。ここでは開山堂と明全和尚の石碑の前で諷経をあげました。しかし、時間が少ししかなかったので臨済宗の伽藍が、どのようなものか見ることができなかったのが残念です。

次に道元禅師示寂の地を拝登しました。この地は道元禅師が建長五年（一二五三）八月二八日、五四歳で入寂された場所とされている所です。

ここからバスで一時間位行って宿泊先である比叡山延暦寺に到着しました。

翌朝、根本中堂での朝課、同じ仏教でも宗派が違うと随分違うものであると驚きました。

次にここからバスで二十分位の所に、道元禅師が仏道修行を始められた横川（よかわ）という所があり、ここに道元禅師得度霊蹟碑が建てられています。道元禅師はここで真剣に天台教学に励まれましたが、わずか三年で比叡山を下りられました。道元禅師はなぜ下りられたのでしょうか。おそらく自分の疑問に答えてくれる師に会いたいという願望、そして真の仏法に対するとてつもなく強い意志が当時の道元禅師を支えていたと思います。

そして祖跡拝登の最後の場所である詩仙堂に向かいました。こちらには、中国の漢晋唐宋の詩家三十六人の肖像が描かれており、頭上に各詩人の詩を四方の壁に掲げた詩仙の間を中心としているところから詩仙堂と呼ばれているそうです。またここにはすばらしい庭園があり、これを眺めていると時間を忘れてしまう気がしました。また違った季節に訪れて四季それぞれの風景を鑑賞したいものです。

これで、すべての拝登は終わり永平寺へと帰りました。一泊二日という短い期間の祖跡拝登でしたが、私にとってはこの二日間は、御開山さまの霊跡を理解する上で実に大切な二日間であったと思います。またこの地を拝登できたことを感謝致します。

私は永平寺で修行することにより、このような貴重な経験が出来たことを喜びに思い、幸せに感じています。

この経験を励みにして、これからも日々弁道していきたいと思います。

（「傘松」より）

南無觀音菩薩摩訶薩波羅蜜多心經